

地域における協同の重要性

10月の後半に、ロシア、ウクライナの農村を訪問した。ロシアで訪問する予定であったある農場に連絡をとったところ「資金繰りが悪化して債権者が押し寄せており、到底視察を受けられるような状況ではない」とのことで、急遽訪問を取りやめざるをえなくなった。ウクライナでは定期預金の引き出しが停止され、IMFの緊急融資受け入れが決定されたところであった。中小の農家の資金繰りは急速に悪化しており、農業の継続に必要な資金が得られるかどうかが深刻に懸念される状況となっていた。「グローバリズム」「市場機能万能主義」は、アメリカに端を発する金融恐慌の波を、あっという間にロシア、ウクライナの農村にまで波及させ、全くそれらと無縁な日々を送っていた農民の生活をも破壊しようとしている。その「市場」は、ほんの少し前までは国際的な穀物の高騰をもたらし、貧困国の人々の食料を奪い、多くの暴動を引き起こすまでに至らしめていたのである。

市場経済の有する効率的な側面は、決して全否定されるべきものではない。膨大な商品を、どれだけ、誰のために生産するかを、市場の機能を介さずに決定するのは不可能なことであろう。しかし、市場の機能を盲目的に信奉し、全てを市場の決定に委ねようとすることもまた大きな誤りである。食料・農業といった、人類の生存に不可欠なものをさえ、そうした「貨幣による投票」に委ねることには、大きな問題が含まれているように思う。

本号の特集する地域経済開発のあり方もまた、単純な市場主義では解決の極めて難しい問題であろう。地域の住民にとっての地域開発は「そこがだめならもっと投資効率のよいところを探せばよい」というものではない。真に持続可能な地域開発は、大資本の大規模リゾート開発に依存するといった形ではなく、「地域の活性化」という価値観を共有する地域の多くの経済主体が、連携した経済活動を積み上げて行くことによってのみ可能となるように思われる。

地産地消を含め、地域内の経済循環の拡大には、地域外への需要の漏出削減による「地域乗数効果」の拡大、税金の域内還流、輸送コストの削減、といった経済的な効果も期待されよう。しかし、より大きな意味を持つのは、そうした連携活動を通じて形成されていく連帯感、共同意識といった、いわゆる「社会的資本」の蓄積ではないかと思われる。

市場経済システム下において、「社会的資本」の形成がどのような意味を持つのか、その実証的・理論的解明はさらに必要であると思われるが、地域の活性化に取り組み、一定の成果をあげている地域を訪問すると、多くの地域において、例えば地域の主婦の集まりであったり、農家とレストランの連携であったり、そうした小さな連携の輪がいくつも生じ、それらが面的な広がりをもって大きく拡大していくようなケースに出会い、連携の重要性を実感させられる。

現在政策的に進められている「農商工連携」は、後述するように、必ずしも地域内連携を中心に据えたものではないが、政策の如何にかかわらず、こうした地域的取組みが活発化していくことは極めて重要であろう。協同組合には、そうした連携の主体として、または「触媒」としての役割が期待されている。

((株)農林中金総合研究所 取締役基礎研究部長 原 弘平・はらこうへい)